

平成 27 年度 Let's びぎんプロジェクト 活動報告書

No.	プロジェクト名	掲載頁
0	(各プロジェクトサマリー)	1-5
1	野に生きる動物の暮らしを覗こう	6-11
2	地域住民によるツキノワグマを中心とした野生動物被害対策への支援活動	12-14
3	Tip's プロジェクト	15-19
4	集まれ！岩手の骨格大集合！！～ホネから見た野生動物たち～	20-25
5	ひろの福幸プロジェクト	26-31

平成27年度Let'sびぎんプロジェクト サマリー

プロジェクト名	野に生きる動物の暮らしを覗こう
<p>【構成員氏名・学部・学年】</p> <p>山口 藍(農 2年) 榊原貴之(農 2年) 三浦 緋乃(農 2年) 大竹阿士(農 2年) 荻野 未来(農 2年) 鎌塚祥子(農 2年) 古山 遥(農 2年) 中川裕太(農 2年) 五日市音央(農 2年) 中里直也(農 1年) 宮前 貴旭(農 1年) 佐藤初音(農 1年) 森 航大(農 1年) 三根琴美(農 1年) 他、Nature Circle けらけら 5名</p>	<p>【活動目的】</p> <ul style="list-style-type: none">・複雑化する野生動物との共生問題を解決できる人材育成を目指す。・身近な環境でも、中型哺乳類などの野生動物が生息していることを知ってもらい、普段からその存在を意識してもらおう。・岩手大学構内の樹木伐採に伴い、住み家を失う動物たちのデータを収集し、今後のより良い環境づくりにつなげる。
<p>【活動の経過・内容】</p> <p>平成27年</p> <p>【8～9月】</p> <ul style="list-style-type: none">・センサーカメラ設置、点検 <p>【10月】</p> <ul style="list-style-type: none">・センサーカメラ点検・不來方祭にてセンサーカメラ写真展実施 <p>【11～12月】</p> <ul style="list-style-type: none">・センサーカメラ点検 <p>平成28年</p> <p>【1月】</p> <ul style="list-style-type: none">・センサーカメラ点検・自然観察会実施(高松の池、上田公民館)	<p>【写真・記録・図表等】</p>  
<p>【得られた成果】</p> <p>センサーカメラで写った動物は、大学構内では、キツネ、リス、ハクビシン、アカゲラ、など計13種。高松公園では、キツネ、タヌキ、テンなどの計10種が確認された。</p> <p>大学構内においては、キツネとリスについて今後何らかの対策が必要だと考えられる。キツネは、今後学内で繁殖する可能性があること、リスは工学部の国道46号線沿いの木々伐採後、自然観察園のカメラに写らなくなったことから、伐採により本来リスが横断しているはずの国道46号線をリスが横断できなくなっていることが判明した。(3月に再度カメラで確認された)</p> <p>不來方祭においては、センサーカメラの画像・映像を見た方から驚きの声上がるなど、多くの方々に身近に野生動物がいることを知ってもらうことができた。</p> <p>観察会は周知が不十分で参加者が集まらず苦労したが、当日は高松の池でカモの観察・解説、センサーカメラの映像・画像を用いての解説、自然史探偵団協力の下で骨格標本を用いての解説など充実した内容で行う事ができた。</p>	

平成27年度Let'sびぎんプロジェクト サマリー

<p>プロジェクト名</p>	<p>地域住民によるツキノワグマを中心とした野生動物被害対策への支援活動</p>
<p>【構成員氏名・学部・学年】</p> <p>太刀川晴之(農3年) 中村 咲恵(農3年) 益田 美佐(農3年) 主濱 亮子(工3年) 中村 哉仁(農3年) 中村 千夏(農3年) 大竹 崇寛(農3年) 佐藤 侑(農3年) 内藤 千里(農3年) 藤崎 博樹(工2年) 他、ツキノワグマ研究会メンバー12名</p>	<p>【活動目的】</p> <p>盛岡市猪去地区にて、以前から農業被害のあるツキノワグマや、新たに被害・生息が確認されたハクビシン、イノシシといった野生動物の生息状況を把握し、地元住民と情報共有・協力して被害対策活動を行うことで被害を減少させる。また、今年度得られた情報をもとに来年度以降も継続的に被害対策活動が行えるような体制作りも目指す。</p>
<p>【活動の経過・内容】</p> <p>平成27年</p> <p>【8月】・センサーカメラ設置場所確認、設置</p> <p>【9月】・センサーカメラ確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家への聞き込み調査 ・被害対策 <p>【10月】・センサーカメラ確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不來方祭にて活動報告 <p>【11月】・センサーカメラ確認</p> <p>【12月～平成28年2月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・センサーカメラ確認、一部カメラ回収 	<p>【写真・記録・図表等】</p>  
<p>【得られた成果】</p> <p>今年度、猪去地区におけるツキノワグマの被害は軽微なものを除き発生しなかったこと、駆除に関しても猪去地区内においては0頭であったことから、本プロジェクトにおいて実施した被害対策活動が一定成果を出せたと考えられる。</p> <p>また、設置していたセンサーカメラにて、9月にイノシシ親子の撮影に成功した。猪去地区においては、三年前にカメラに写って以来未確認状態が続いていたが、今回の撮影を受け、イノシシが生存・繁殖していることが確認できた。写真では、今年度出産したウリ坊5頭と昨年度出産したと思われる子供2頭が確認でき、猪去地区にて繁殖していることが見て取れる。その後、2月にもイノシシが土を掘り返した跡と足跡が発見され、今後このまま数が増え続ければ猪去地区の新たな脅威になる可能性も十分にあることから、継続して被害対策活動を行っていく必要がある。</p>	

平成27年度Let'sびぎんプロジェクト サマリー

プロジェクト名	Tipsプロジェクト
<p>【構成員氏名・学部・学年】 高田 敦紀（農 4年） 佐竹 望（農 4年） 手塚 花実（工 4年） 増田 純平（工 4年） 情野 友紀（農 4年） 坂野 昇平（農 4年） 関本 あすみ（農 2年） 高橋 千尋（農2年） 中村 恵美（農 2年） 三浦 優（農 2年） 藤原 拓摩（農 2年）</p>	<p>【活動目的】 地域木材を利用し、学内環境の改善を行うことが最大の目的である。学生自らが学内環境の問題を発見し、解決する雰囲気を作り出し、その材料として地域木材や未利用材を利用することで地域課題解決をはかる狙いもある。</p>
<p>【活動の経過・内容】 平成27年 【8月】・材料準備(機械・木材購入) 【9月】・参加メンバー募集、テーブルとベンチ製作・設置 【10月】・テーブルとベンチ製作・設置、工学部伐採木活用アイデアWS 【11月】・木道製作、工学部伐採木活用アイデアWS 【12月】・木道製作、外部イベント参加による広報活動 平成28年 【1月】・前年活動反省・新年活動方針決定 【2～3月】・看板製作</p>	<p>【写真・記録・図表等】</p>  
<p>【得られた成果】 農学部食堂前に設置したテーブル(3台)・ベンチ1台の制作、ハンカチノキの根元保護・観察に訪れた人が快適に歩けることを目的とする木道の制作、国道46号線拡張に伴い伐採された木材活用の為のワークショップ開催等、計画していた「地域木材を利用した学内環境改善活動」を全て実行でき、目標としていたことはほぼ達成できた。 今後は、さらに多くの人を巻き込み、多くの人に木材の良さと課題を伝えていきたい。</p>	

平成27年度Let'sびぎんプロジェクト サマリー

プロジェクト名	集まれ！岩手の骨格大集合！！ ～ホネから見た野生動物たち～
【構成員氏名・学部・学年】 中川裕太（農 2年） 平山史歩（農 2年） 山田庸平（農 2年） 中野風子（農 2年） 荻野未来（農 2年） 鎌塚祥子（農 2年） 野田敏樹（農 2年） 菊池康太郎（農 2年） 高木場のり子（人社2年） 松浦理沙子（農1年） 他、自然史探偵団10名	【活動目的】 ・岩手でも人間との軋轢が多く発生している、自然や野生動物をテーマに活動を行い、多くの人の岩手県の自然や動物への興味関心を得ること。 ・我々が今後もプロジェクトを継続していくために、標本の輸送方法や展示のポイントなどに関するノウハウを蓄積すること。
【活動の経過・内容】 平成27年 【4月～5月】 ・展示会(滝沢市ネイチャーセンター) 【7月～8月】 ・展示会(野生動物医学会大会) 【9月】 ・展示会(野生動物医学会・学生大会) および骨格標本作成方法の紹介 【10月】 ・不來方祭にて展示 平成28年 【1月】 ・動物の骨について講演(上田公民館) ・鳥の仮剥製講座(奥州市牛の博物館)	【写真・記録・図表等】  
【得られた成果】 展示会を複数回にわたり実施したことにより、親子連れを中心に多くの人に見てもらえることができ、骨格標本を通して子ども達にも岩手の自然・野生動物について知ってもらえることができた。また、県内外の様々な施設や団体と交流・協力してプロジェクトを推進することができ、様々なノウハウを蓄積することができた。 今後は、興味関心を得るだけでなく、自然や野生動物を取り巻く問題、人間社会との軋轢などについても紹介する等、より発展的な展示会・ワークショップを開催したい。	

平成27年度Let'sびぎんプロジェクト サマリー

プロジェクト名	ひろの福幸プロジェクト
---------	-------------

【構成員氏名・学部・学年】

佐藤 優人(人社1年)	村田 佳之(人社1年)
小森 和樹(人社1年)	安藤 樹 (人社1年)
石岡 学歩(人社1年)	鈴木 健太(人社1年)
槻木澤 楓(人社2年)	芦口 和哉(人社1年)
岡田 翔 (人社1年)	田代 亮平(人社1年)
槻木澤 霞(人社3年)	熊谷 綾香(人社1年)
林 彩貴(人社1年)	羽生 絢子(人社1年)

【活動目的】

- ・洋野町の郷土食、日常食の調査を行うことでその良さを再発見し、その良さを未来の世代へと継承させる。
- ・食文化の再発見と普及を通し、大野と種市、洋野と他の沿岸地域、岩手と他県、新旧世代、生産者と消費者など多くの絆を作りだす。

【活動の経過・内容】

平成27年

【10月】

- ・不來方祭での洋野町のPR活動(パネル展示、洋野バーガー販売、洋野町に関連したグッズ販売)
- ・Twitter開設
- ・洋野町での聞き取り調査(漁業関係者:6名)

【12月】

- ・洋野町での聞き取り調査(酪農業関係者他:9名)

平成28年

【1月・2月】

- ・記事作成、文章校正、納品(発行部数:500部)

【3月】

- ・県立大野高校訪問

【写真・記録・図表等】



【得られた成果】

不來方祭において、洋野町と、本プロジェクトを紹介する2種類パネルを用いてのPR活動、全て洋野町産の食材を使用した「洋野バーガー」の販売、その他洋野町に関するグッズ販売を行い洋野町ならびに本プロジェクトの周知を行い、多くの方に洋野町を知って頂けた。しかし、購入者の声を聞く機会が無かったことから、購入者の声を生産者へフィードバック出来なかったことが反省点としてあげられた。

冊子の作成については、洋野町の〈海〉と〈山〉それぞれの魅力を、『人』にスポットを当てインタビューを行ったことにより、観光パンフレットとは違う生産者の「思い」がこもった「大学生らしい冊子」に仕上げる事が出来た。

平成 27 年度 Let's びぎんプロジェクト 実施結果報告書

プロジェクト名： 野に生きる動物の暮らしを覗こう

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

山口藍	農学部	共生環境課程	2年
榊原貴之	農学部	共生環境課程	2年
三浦緋乃	農学部	共生環境課程	2年
大竹阿士	農学部	共生環境課程	2年
荻野未来	農学部	共生環境課程	2年
鎌塚祥子	農学部	共生環境課程	2年
古山遥	農学部	共生環境課程	2年
中川裕太	農学部	共生環境課程	2年
五日市音央	農学部	共生環境課程	2年
中里直也	農学部	共生環境課程	1年
宮前貴旭	農学部	共生環境課程	1年
佐藤初音	農学部	共生環境課程	1年
森航大	農学部	共生環境課程	1年
三根琴美	農学部	動物科学課程	1年
佐藤和人	農学部	共生環境課程	1年
村田美和	農学部	動物科学課程	1年
多田峻太郎	農学部	共生環境課程	1年
押切智博	農学部	共生環境課程	1年
飯塚智崇	農学部	共生環境課程	1年

2. 活動目的

大学構内や高松公園のような、中型哺乳類などの野生動物が生息しているとは考えられていないような身近な環境でも、目撃されていないだけで、野生動物が生息していることをもっと多くの人に知ってもらいたい。また、その野生動物の活動の一部を知ってもらう

ことによって、野生動物に興味をもってもらい、普段からその存在を意識してもらいたい。野生動物との共生の問題は複雑で、駆除だけでは軋轢問題は解決していない。革新的な解決方法を考えることができる人材育成という意味で、小学生から大人まで、幅広い世代を対象として活動を行う。子どもたちには、人間も野生動物も生き物で、彼らにも彼らの生活があることを知ってもらった上で、野生動物と人との共生について、先述した問題について考えることができるようになってほしい。また、プロジェクトを行っていくなかで、大学構内の木々が伐採され、野生動物たちが利用していると考えられる環境が人間に知られることもなく、失われている可能性もあるということが明らかとなった。そのため、人間にとっても、大学構内の環境を利用する野生動物にとっても、より良い環境づくりにつなげていくために、伐採前と後の状況を比較できるようにデータを集めることもこのプロジェクトの目的とした。

3. 活動の経過・内容

センサーカメラを大学構内の自然観察園と農学部植物園に4台と、高松公園に3台の計7台設置した。およそ2週間に1回の頻度でセンサーカメラをチェックしに行き、写っている動物を確認した。

不来方祭では、センサーカメラで写った動物の写真を展示し、動画もパソコンで流して、一般の方にも大学構内や高松公園に野生動物が生息していることを紹介した。

2016年1月24日に高松の池にてカモの観察会と、上田公民館にて勉強会を開催した。

4. 結果報告

センサーカメラで写った動物は、大学構内では、キツネ、リス、ハクビシン、ネズミ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、キジバト、アトリ、ツグミ、シジュウカラ、ヤマガラ、ネコの計13種。高松公園では、キツネ、タヌキ、テン、ハクビシン、ネズミ、カケス、アカゲラ、キジバト、シジュウカラ、ネコの計10種。大学構内のセンサーカメラの結果からキツネとリスについて今後何らかの対策が必要だと考えられる問題が明らかになった。キツネについては、自然観察園でかなり頻繁に写っており、キツネが掘っている穴も構内で発見された。キツネは自身で巣穴を掘り、巣の周辺に軍手やボールなどを集める習性があるが、その穴の周辺にも軍手とボールが落ちていたため、巣として利用する可能性が高いと考えられる。また、自然観察園ではキツネが2匹写っており、もしペアであれば繁殖する可能性があり、先述した穴が使われるのであれば、何らかの配慮が必要である。リスについては、工学部の国道46号線沿いの木々が伐採された、10月後半からリスが写らなくなり12月後半まで全く写らなかった。この国道46号線をリスが横断していることは研究(注1)で明らかになっている。リスは1月以降も全く写らなかったが、3月に入ってからまた写り出した。よってリスは自然観察園をまだ利用しているようだが、本来リスが横断しているはずの国道46号線をリスが横断できなくなっていることが考えら

れる。

不來方祭では、センサーカメラの画像や映像を見て下さった方から、「大学にこんな動物がいるなんて知らなかった」などの声を受け、身近な環境に野生動物が生息していることを知らなかった方に知ってもらうことができた。

観察会では、周知がなかなか上手くいかず、参加者を集めることが出来なかったが、内容としては、高松の池でメンバーが制作したカモ図鑑を使ってカモ観察を行った後、上田公民館で詳細なカモについての解説、センサーカメラの画像や映像を用いて身近な野生動物の生態についての解説、更に自然史探偵団の協力のもと、骨格標本を使って骨の面から見た野生動物についての解説を行ったため、充実していた。

(注1：西 千秋. 2006. 岩手大学構内におけるニホンリスの生息実態に関する研究. リスとムササビ 18:11-13.)

5. 今後の活動予定

センサーカメラについては、今後も継続して設置し、特に大学構内の野生動物について、大学構内の環境変化によって生息地を奪われることがないようにするために観察を続ける。キツネについては何らかの方法でキツネが大学構内だけで生息しているのか、それとも生息地の一部として大学の敷地を利用しているのかなど、キツネの行動を追跡することができないか検討する。リスについては、国道46号線を横断できるようにオーバブリッジを設置したい。そのため、国交省に交渉することも検討する。また、大学構内の野生のリスに対する認知度が低いと感じるため、給餌台を設けるなどして、リスの認知度を上げることにより、リスにとってより良い環境が創出されることにつなげたい。リスに関しては、来年度もLet'sびぎんプロジェクトに応募し、オーバブリッジや給餌台を設置するプロジェクトを計画することも検討する。

観察会については、このプロジェクトで行った観察会では参加者をあまり集めることが出来なかったため、サークルの活動としてか、プロジェクトに再度応募して行うかは未定だが、再度観察会を行いたい。理想としてはサークルの活動として観察会を定期的に行いたい。

<活動の写真>

センサーカメラ



センサーカメラに写ったリス



センサーカメラに写ったキツネ



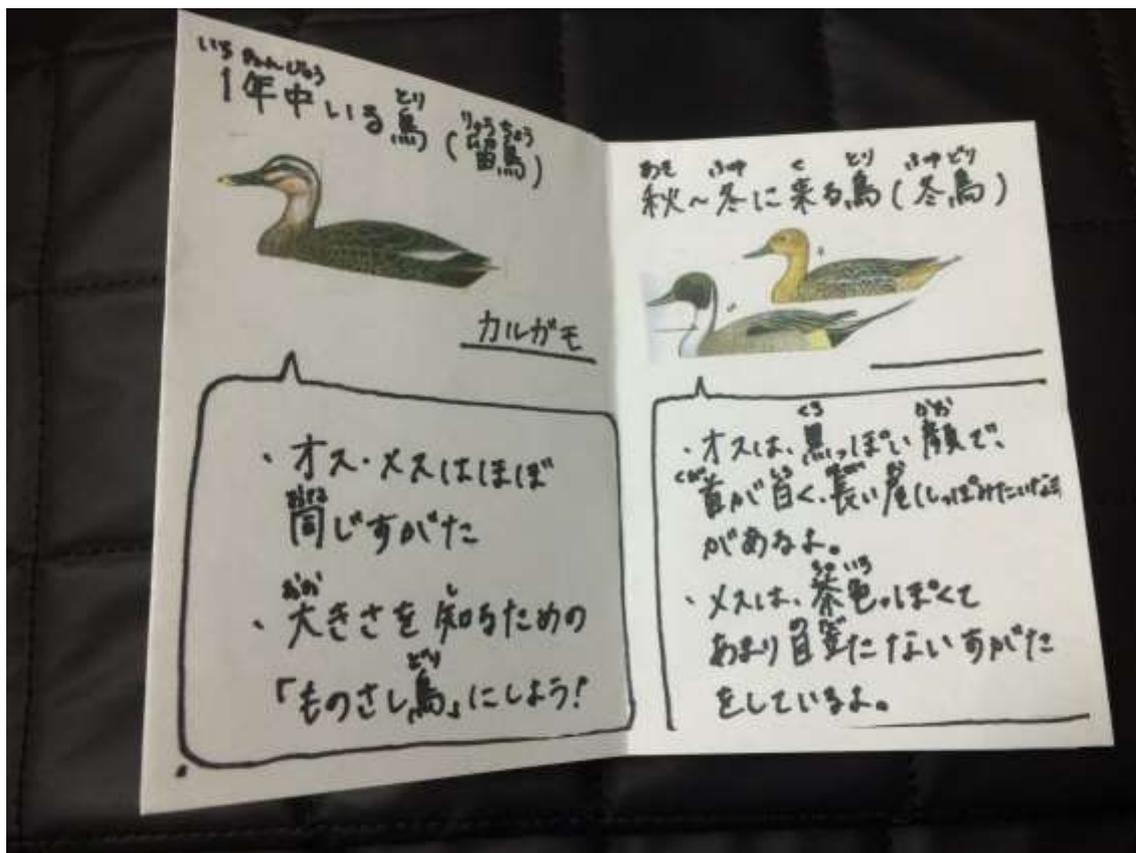
高松の池での観察会の様子



上田公民館での勉強会の様子



メンバーが作成したカモ図鑑



平成 27 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名

地域住民によるツキノワグマを中心とした野生動物被害対策への支援活動

1. 構成員氏名・学部・学科(課程)・学年

氏名	学部	学科課程	学年
太刀川 晴之	農	共生環境	3
中村 咲恵	農	共生環境	3
益田 美佐	農	共同獣医	3
主濱 亮子	工	応用化学生命工学	3
中村 哉仁	農	共生環境	3
中村 千夏	農	共生環境	3
大竹 崇寛	農	共生環境	3
佐藤 侑	農	共生環境	3
内藤 千里	農	共生環境	3
藤崎 博樹	工	電気・電子情報システム	2
目黒 康大	工	機械システム工	2
水田 晴也	農	共同獣医	2
佐々木 花野	人文社会	国際文化	2
神 さくら	農	共同獣医	2
鎌塚 祥子	農	共生環境	2
村上 貴史	教育	生涯教育	2
浜田 亜美	農	共生環境	2
久門 美月	農	共生環境	2
中川 裕太	農	共生環境	2
野田 敏貴	農	共生環境	2
荻野 未来	農	共生環境	2
渡辺 聖夏	農	共生環境	2

2. 活動目的

普段サークルの活動を行っている盛岡市猪去地区では25年ほど前からツキノワグマによる農業被害が発生している。近年は継続した被害対策活動もあり被害は減少しているものの完全に無くなったとは言えず、さらにハクビシン被害の発生やイノシシの生息も確認された。これらの野生動物の生息状況を把握して地元住民と情報共有し、協力した被害対策活動を行うことで被害を減少させることを目的として活動する。また、今年度得られた情報をもとに来年度以降も継続的に被害対策活動が行えるような体制作りも目指す。

3. 活動の経過・内容

6月から11月にかけて学生・教員、地元農家、市の農政課の方々と合同で4回の被害対策活動を実施した。内容としては果樹園へのツキノワグマの侵入を防ぐ電気柵を設置と撤去作業、柵の効果を持続させることと動物が里に下りて来にくくする緩衝地帯の作成を目的とした下草刈りを行った。

その活動と並行して、果樹園周辺にプロジェクトの予算で購入したセンサーカメラを設置し定期的な点検を行うことで野生動物の生態状況を把握した。野生動物の情報に関しては「お知らせ」を作成し、町内会の回覧板で回して頂くことで全ての農家さんに情報が行き渡るようにした。

4. 結果報告

今年度猪去地区でのツキノワグマの被害は夏にリンゴの木の枝を折られた被害があったこと以外はほとんど発生しなかった。駆除に関しても盛岡市全体8頭の内0頭であった。これに関して考えられるのは、まず我々の被害対策活動の効果の表れだと考えられる。また、今年度の猪去はツキノワグマの主な餌資源であるブナやミズキの実りが豊富であり、そもそも里に下りてくるツキノワグマの数が少なかったのではないかと考えられる。

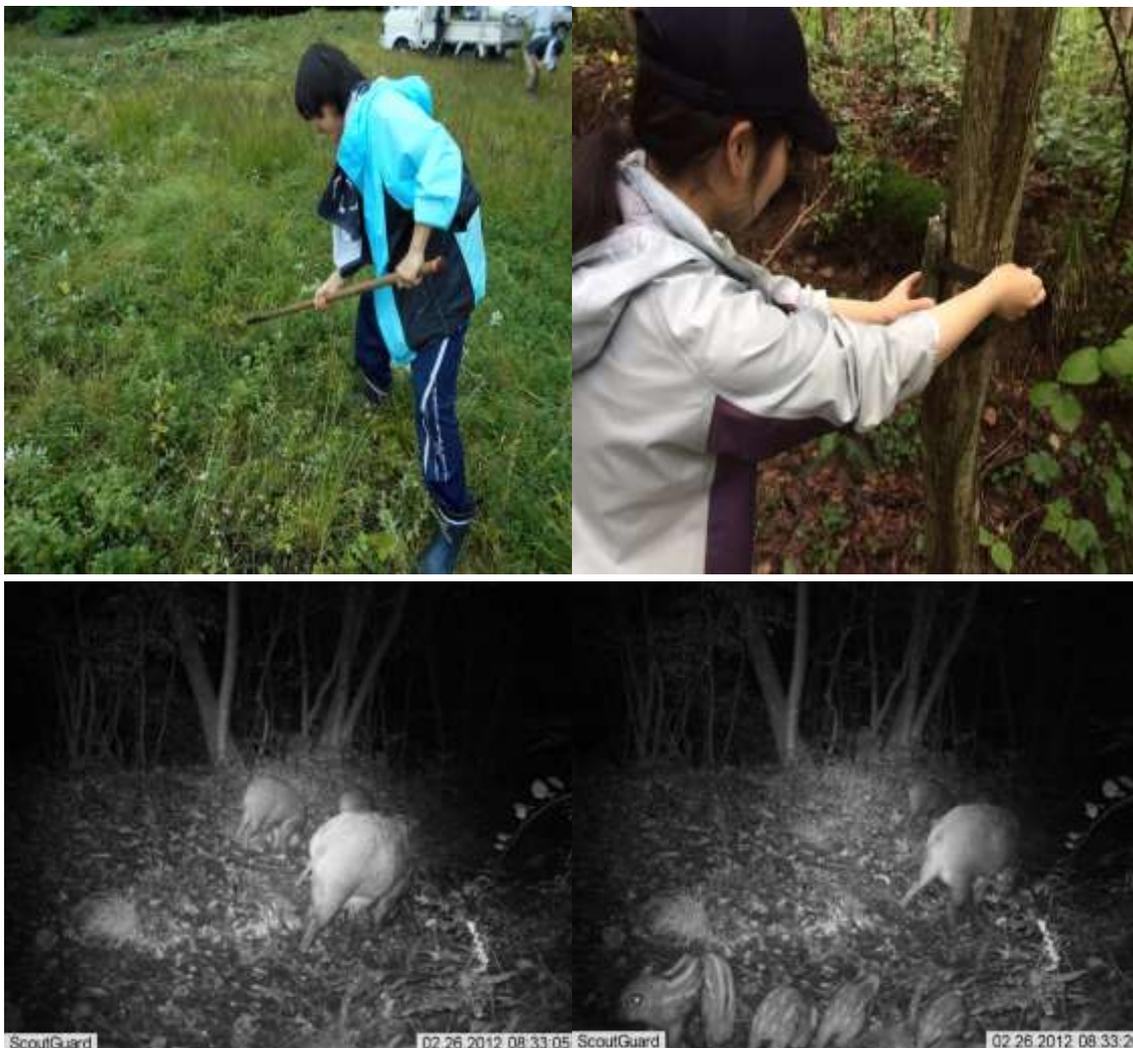
また9月に設置していたセンサーカメラがイノシシの親子を撮影した。猪去でのイノシシは三年前に一度カメラに写って以来ずっと確認されていなかったが、今回そのイノシシが今年まで生き残りさらに繁殖していることが確認された。確認された子供は今年度出産したウリ坊五頭と昨年度出産したと思われる子供が二頭である。2月にもイノシシが土を掘り返した跡と足跡が発見され、今後このまま数が増え続ければ猪去地区の新たな脅威になる可能性も十分にある。

5. 今後の活動予定

まず来年度以降も継続して被害対策活動への参加を行っていく。ツキノワグマの餌資源となるブナやミズキの実りは豊作と凶作交互に起こるため、来年度は今年度の反動で実りが減ることが予想される。その結果としてツキノワグマが里に下りてくる頻度も増加する可能性も十分に考えられる。今年度被害が少なかったからと油断せず来年度も活動していきたい。

イノシシの生息状況に関しても、センサーカメラで引き続き確認する。今回とは異なる場所でイノシシが撮影されたり、被害や痕跡が見つかったりした場合には迅速に地元農家さんに知らせて市に報告できるようにしたい。

<活動の写真>



平成 27 年度 Let's びぎんプロジェクト 実施結果報告書

プロジェクト名： Tip's プロジェクト

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

高田 敦紀 ・農・共生環境・4
佐竹 望 ・農・農学生命・4
手塚 花実 ・工・応用化学・4
増田 純平 ・工・電気電子・4
情野 友紀 ・農・応用生物・4
坂野 昇平 ・農・共生環境・4
関本 あすみ・農・共生環境・2
高橋 千尋 ・農・共生環境・2
中村 恵美 ・農・共生環境・2
三浦 優 ・農・共生環境・2
藤原 拓摩 ・農・共生環境・2

2. 活動目的

地域木材を利用し、学内環境の改善を行うことが最大の目的である。学生自らが学内環境の問題を発見し、解決する雰囲気を作り出し、その材料として地域木材や未利用材を利用することで地域課題解決をはかる狙いもある。

3. 活動の経過・内容

目的達成のため、主に 3 つの取組を行った。1 つ目が、木のテーブル・ベンチを作製し農学部横のスペースに設置すること、2 つ目が岩手大学附属植物園のハンカチノキの周辺に木道を設置すること、3 つ目が学内環境の課題発見・解決のためのアイデア出しワークショ

ップを企画することである。

以下に、月ごとの活動経過と内容をまとめる。

8月～材料準備（機械・木材購入）

9月～参加メンバー募集、テーブルとベンチ製作・設置（9/13～）

10月～テーブルとベンチ製作・設置（～10/25）、工学部伐採木活用アイデアWS（10/29）

11月～木道製作（11/10～）、工学部伐採木活用アイデアWS（11/5、11/13、11/、27）

12月～木道製作（12/27）、外部イベント参加による広報活動（12/28）

1月～前年活動反省・新年活動方針決定

2月～看板製作（2/18～）

3月～看板製作（～3/14）、最終報告会

4. 結果報告

【目標達成度】

計画していた活動をすべて実行したことから、地域木材を利用し、学内環境の改善を行うという目的を達成したといえる。また、材料として雫石町の建築会社との連携により、地域木材や未利用材を利用することができた。目標としていたものは、ほぼ達成され、次につながる活動が実施できたといえる。さらに多くの人を巻き込み、多くの人に木材の良さや課題を伝えられるかが今後の課題となる。

【成果】

- 1) テーブル(3台)・ベンチ (1台)
- 2) 木道 (12m)
- 3) 木材利用アイデア
- 4) 広報活動

1) テーブル・ベンチ

テーブル3台、ベンチ1台をそれぞれ違うメンバーがデザイン・設計を行い製作した。製作したテーブル・ベンチは農学部食堂横に設置した。

●良かった点

- ・メンバー外の学生を巻き込めた
- ・木工用具、機械の使い方をまなび、スキルアップにつながった。
- ・食堂混雑時等に利用が見られた。

●反省点

- ・なぜつくったのか、という広報が遅かった。

- ・ベンチの数が足りず、不足分は農学部食堂横にある既存の椅子を利用することとなった。
- ・使用した感想を聞き取ることができなかった。

2) 木道

ハンカチノキの根元を保護すること、観察に訪れた人が快適に歩けることを目的として製作した。また、ハンカチノキについての説明、本プロジェクトの説明をした看板をそれぞれ1つずつ製作・設置した。

●良かった点

- ・農学部食堂利用者からの注目があつた。
- ・地域の方との交流があつた。
- ・様々な課題があつたが乗り越え完成できた。

●反省点

- ・広報、下準備が遅く、スムーズな進行ができなかった。
- ・メンバー外の学生を巻き込めなかった。

3) 木材利用アイデア

道幅拡張の工事のため、工学部で樹齢60年以上の樹木が約60本伐採された。この多くは燃料用チップにされるとのことで、材として活用するために伐採木の一部を譲り受けた。そして、この伐採木を活用するためのアイデア出しをするワークショップを実施した。全5回実施し、プロジェクトメンバー以外の多くの方にも参加していただいた。

●良かった点

- ・多くのユニークなアイデアが生まれた。
- ・様々な学生を巻き込めた。

●反省点

- ・具体的な次の活動計画に落とし込めなかった。
- ・回数を減らした方がまとまりがよかった。

4) 広報活動

プロジェクト採択と同時に Facebook ページを立ち上げ、活動を随時報告した。記事掲載は全39回におよび、多くの方に見ていただいた。また、東北ふるさとづくりパートナーズという団体が実施する、盛岡に在住する方と都市に暮らし盛岡に帰省してきた方が交流するイベントに代表の高田がゲストスピーカーとして参加し、広報活動を行った。また、電子ジャーナルの「Agrio」(2016年3月22日発行の号)で紹介していただいた。

●良かった点

- ・多くの方に情報を届けることができた。
- ・活動記録の習慣ができた。
- ・メンバーの意識向上にもつながった。

●反省点

- ・イベント告知が遅かった。
- ・更新頻度が不定期であった。

5. 今後の活動予定

本プロジェクトは、平成 28 年度からは、学内カンパニーMorito に引き継ぎ、今後とも活動を続けていく予定である。工学部で伐採された木材は、現在活動に協力していただいている小田建築さまの工場丸太として保管していただいている。この丸太を 6 月までに製材しさらに乾燥の過程を経て、夏には学内で利用する予定である。本プロジェクトで行ったワークショップでのアイデアと、木工経験を活かし、デザイン性・機能性の高いテーブル・ベンチを製作する予定である。そこから、残った木材を本プロジェクトで行ったワークショップにおいて出た多くのアイデアを活用し、話題性のある活動を仕掛け、木材利用の重要性と良さを伝えていけると良いと考えている。

つくるだけではなく、「教える・伝える」という点を大事にした活動に発展させたい。そのために、より多くの学生と、地域住民を巻き込んだ活動、木工体験等の体験型イベントの実施等も予定している。

<活動の写真>



テーブル製作の場面の一部



ほぞ穴加工機



看板設置完了



木道完成、歩いて確認



工学部構内の伐採木の一部



第一回ワークショップ集合写真

平成 27 年度 Let's びぎんプロジェクト 実施結果報告書

プロジェクト名： 集まれ！岩手の骨格大集合！！

～ホネから見た野生動物たち～

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

- | | | | | | | | |
|---------|----|--------|---|--------|---|--------|---|
| ・中川裕太 | 農 | 共生環境 | 2 | ・平山史歩 | 農 | 応用生物化学 | 2 |
| ・山田庸平 | 農 | 共生環境 | 2 | ・中野風子 | 農 | 動物科学 | 2 |
| ・萩野未来 | 農 | 共生環境 | 2 | ・鎌塚祥子 | 農 | 共生環境 | 2 |
| ・野田敏樹 | 農 | 共生環境 | 2 | ・菊池康太郎 | 工 | 社会環境工学 | 2 |
| ・高木場のり子 | 人社 | 人間科学 | 2 | ・松浦理沙子 | 農 | 応用生物化学 | 1 |
| ・樋口リサ | 農 | 応用生物化学 | 1 | ・伊藤沙南 | 農 | 農学生命 | 1 |
| ・千葉珠絵 | 農 | 農学生命 | 1 | ・佐藤和人 | 農 | 共生環境 | 1 |
| ・飯野彩花 | 農 | 共生環境 | 1 | ・豊間根美桜 | 農 | 共生環境 | 1 |
| ・佐藤初音 | 農 | 共生環境 | 1 | ・押切智博 | 農 | 共生環境 | 1 |
| ・山田侑乃 | 農 | 共生環境 | 1 | ・高橋長仁 | 農 | 共生環境 | 1 |

2. 活動目的

1. 岩手でも人間との軋轢が多く発生している、自然や野生動物をテーマに活動を行い、多くの人の岩手県の実然や動物への興味関心を得ること。
2. 我々が今後もプロジェクトを継続していくために、標本の輸送方法や展示のポイントなどに関するノウハウを蓄積すること。

3. 活動の経過・内容

平成 27 年

4月19日～5月10日 滝沢市ネイチャーセンターにて展示会

7月30日～8月2日 野生動物医学会大会にて展示会（酪農学園大学生と協力）

9月14日～9月16日 野生動物医学会・学生大会にて展示会および、骨格標本作成方法の紹介（東京都新宿区）

10月16日・17日 不來方祭にて展示

平成 28 年

1月24日 上田公民館にて動物の骨について講演（けらけらと合同で実施した自然観察会にて）

1月25日 奥州市牛の博物館にて鳥の仮剥製講座の実施（奥州市牛の博物館、大阪自然史センターと共同で実施）

4. 結果報告

- ・展示会自体はたくさん開催することが出来、多くの人に見てもらうことが出来た。中には親子連れも多く、子供たちにも岩手の自然、野生動物について知ってもらうことが出来た。
- ・初めて間近で骨格標本をみるような人もいて、興味関心を持ってもらうことが出来た。
- ・展示を行った場所や時間によっては質問に答えたり、観覧者と交流したりということが出来た。その中で野生動物の交通事故の問題や自然について伝えたり、意見を交換したりすることができた。
- ・県内外の様々な施設、団体と交流、協力し、プロジェクトを推進することが出来た。
- ・もともと自然や野生動物に興味を持っている人が良く訪れる施設などでの展示がやや多かった。
- ・展示方法などは工夫し、タッチオン展示(触って手に乗せることが出来る展示)も展示することが出来た。
- ・標本の輸送に関しても、木箱やスタイロフォームを使い、標本を壊さずに運搬することが出来た。
- ・イベントの開催時期やタイミング、告知の方法が悪かったのか、参加者があまり集まらないものもあった。

5. 今後の活動予定

今後も本プロジェクトで得たノウハウを活用し、継続して様々な施設、団体と協力

して、展示やワークショップなどを続けていく。また、今回実施した形式にこだわらずに、様々なアプローチで、より多くの人に岩手の自然や野生動物に目を向けてもらうような活動を目指す。興味関心を得るだけでなく、自然や野生動物を取り巻く問題、人間社会との軋轢などについても紹介していきたい。そして、イベントを行う際は、開催場所、開催時期、宣伝方法などに留意して行う。

<活動の写真>



↑ 滝沢市ネイチャーセンターでの展示の様子



↑野生動物医学会(酪農学園大学)での展示の様子



↑野生動物医学会 学生大会(新宿オリンピックセンター)での展示の様子



↑大学での展示の様子



↑動物の骨についての講演の様子(けらけらと合同で行った自然観察会にて)



↑鳥の仮剥製講座の様子(奥州市牛の博物館)



↑鳥の仮剥製講座の様子(奥州市牛の博物館)

平成 27 年度 Let's びぎんプロジェクト 実施結果報告書

プロジェクト名： ひろの福幸プロジェクト

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

佐藤 優人	(人文社会科学部 法学・経済課程	1年)
村田 佳之	()
小森 和樹	()
安藤 樹	()
石岡 学歩	()
鈴木 健太	()
槻木澤 楓	(2年)
芦口 和哉	(人文社会科学部 国際文化課程	1年)
岡田 翔	()
田代 亮平	()
槻木澤 霞	(3年)
熊谷 綾香	(人文社会科学部 環境科学課程	1年)
林 彩貴	()
羽生 絢子	()

2. 活動目的

当プロジェクトの活動目的は以下の 2 点である。

- ・洋野町の郷土食、日常食の調査を行うことでその良さを再発見し、その良さを未来の世代へと継承させる。
- ・食文化の再発見と普及を通し、大野と種市、洋野と他の沿岸地域、岩手と他県、新旧世代、生産者と消費者など多くの絆を作り出す。

3. 活動の経過・内容

目的を達成するため、

- ・ 不來方祭での洋野町の PR 活動
- ・ 洋野町での聞き取り調査と冊子の作成
- ・ 県立大野高校生徒の交流

を具体的活動として取り組んだ。

まず不來方祭であるが、ひろの福幸プロジェクトでは、洋野町の PR を目的としてこれらのことに取り組んだ。

- ・ パネルを使った洋野町/当プロジェクトの紹介
- ・ 洋野バーガーの販売
- ・ ひろの color のハンドメイドのグッズの販売
- ・ 大野ふるさと公社の方による、特産品の販売
- ・ 事前広報活動として Twitter を開設した。

聞き取り調査については以下の 2 回、活動を行った。

初回の聞き取り調査は 2015.10.31 に洋野町種市で行った。

調査対象は主に漁業に携わる方々である。

具体的には

- ・ 一般社団法人 岩手県栽培漁業協会 種市事業所 所長 箱石和廣 氏
- ・ 種市南漁業組合 筆頭理事 ウニ漁師 吹切信夫 氏
ウニ漁師 吹切 守 氏
- ・ 潜水士 ホヤ漁師 磯崎 司 氏
- ・ はまなす亭 社長 岩手県認定食の匠 庭 静子 氏

2 回目の聞き取りは 2015.12.5 に洋野町大野で行った。

調査対象は主に酪農業に携わる方々にした。

具体的には

- ・ おおのミルク工房 浅水 巧美 氏
- ・ 間澤牧場 間澤 葉子 氏
- ・ 食の匠(久慈地域) 大野産直友の会 会員 東大野 清子 氏
- ・ ミナミ食品 南 エイ子 氏
- ・ 大野産直友の会 副会長 木村 ツヤ子 氏
- ・ 豆風鈴 村田 チェ 氏
- ・ 水沢地域パン等加工組合 組合長 秋山 陽子 氏

に聞き取りを行った。

また、冬季休業中に、

- ・ほうれん草 芦口 久七 氏
- ・ひろの屋 社長 下苧坪 典之 氏

にも聞き取りを行った。

聞き取り調査終了後、当プロジェクトではインタビュー内容をまとめた冊子作成に取り組んだ。冊子は 500 部程度発行し、今後は意見等を反映させながらの増刷を考えている。

2016.3.7 に県立大野高校を訪問し、ひろの福幸プロジェクトの紹介や、洋野の食について高校生に考えてもらう時間を設けた。

4. 結果報告

不來方祭では、洋野町のことを紹介するパネルと、「ひろの福幸プロジェクト」を紹介するパネルの 2 枚を用いての PR 活動を行った。

- ・パネルを展示したことで、実際に足を止めて見てくださった方がいた。
- ・「洋野町ってどこにあるの?」「どのようなところなの?」などという質問をいただき、パネルには書ききれない部分まで興味を持っていただけた。
- ・パンフレット等を配り実際に洋野を知っていただけた。

次に洋野バーガーの販売である。

これは、バンズ、パティ、野菜 すべてを洋野町産のものを使い、当プロジェクトの目的の一つである「食」を通した洋野町の PR をするために行った。

評価としては、

- ・洋野の食材を使った物を提供する事で、実際に洋野の「味」を愉しんでいただけた。
- ・リピーターの方もいるなど、反響があり、「食」を通した PR 活動ができた。

・ひろの color のハンドメイドのグッズを販売と大野ふるさと公社の方による、特産品の販売については、洋野町の物品を販売することで、実際に手に取って洋野を感じてもらうことができた反面、買っていただいた方の声を聞けるような工夫をすればよかったという反省も出た。

生産者と消費者をつなぐという観点から言えば、自分たちが買っていただいた方の声を生産者の方々にフィードバックできるような仕組みを考えるべきであったと考える。

また、今回は、事前広報活動として Twitter を開設し情報提供を行った。

これについての評価は、

- ・Twitter を開設することで情報発信をすることが容易になった。
- ・情報発信はできたが、タイミングが少し遅かったので、次回から活動を行う際は早めに情報発信を行うようにしたい。というものだった。

今回は試験的な利用にはなってしまったが、今後も継続的に情報提供に利用していきたいと思っている。

聞き取り調査を通しての評価についてまとめる。

- ・洋野町の食に携わる方の声を聞き、食材の生産に対する思いを聞くことができた。
- ・人にスポットを当てることで、観光パンフレットのようにならない冊子を作るために必要なインタビューを行うことができた。
- ・事前質問をしっかりと準備していたことは良かったが、相手の返答に合わせた質問ができないときがあった。
- ・洋野町の良さを県内外にもっと広めてほしいという言葉がインタビュー中に聞かれた。
- ・ありきたりではない、自分たちの言葉で伝える工夫をしなくてはならないと思った。

次に冊子作成についてである。

- ・今回、インタビュー結果を十分に反映させた冊子を作製することができた。観光パンフレットのようにならない、大学生らしい冊子にできた。
- ・『人』にスポットを当てることで、生産しているものへの「人の思い」を紙面にまとめることができた。
- ・総勢 13 名の方にインタビューし、〈海〉側である種市と、〈山〉側である大野、それぞれを知ることができるようにした。「岩手の縮図」である洋野の魅力を感じることができるようにした。
- ・B5 判にすることで、手に取りやすく読みやすい紙面にした。

県立大野高校生との交流は、今回は簡単なものになってしまったが、今後は地元の行事等に共同参加するための足掛かりになる活動であったと考える。

5. 今後の活動予定

今後は以下のような活動を予定している。

- ・県内外での冊子の配布活動
- ・高校生との地元の祭りや行事等への参加（ボランティアとして）

<活動の写真>



